

これからの時代に生きる教員を育てる教員研修の在り方に関する研究 ～校内研究モデルプランの作成を通して～

千葉県総合教育センター
カリキュラム開発部研究開発担当
研究指導主事 香取 伸嘉

1 主題設定の理由

学校現場では、各教科等の指導に当たって、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。そのためには、各学校がそれぞれの教育課題に応じた授業改善の手立てを工夫し、全教職員の共通理解のもと取り組む校内研究の充実が不可欠である。また、多忙化解消に向けた学校の業務改善も求められている状況から、各学校で、限られた時間の中で教職員が協働して取り組む校内研究が必須である。校内研究が組織的に行われることにより、教職員間での組織目標の共有化とそれに伴う協働が進み、学校の組織力の向上も期待できる。

千葉県総合教育センターでは、これまでに校内研究や研修に関する調査研究を行い、「校内研究ガイドブック」（平成21年3月）、「すぐに使える校内研修の手法とツール～参加・体験型研修のすすめ～」(平成28年3月)を作成・配布してきた。また、研修事業での講話・演習を通して活用を図るなど、校内研究の充実が図られるように努めてきた。

しかしながら、近年、研修時間の確保が難しい、経験の浅い研究主任が校内研修をどのように進めていったら良いか悩んでいるなどの様々な理由により、校内授業研究が十分に機能しなくなってきたという声も聞こえてくる。

そこで、校内研修の中核である校内研究の進め方に焦点を当て、校内研究モデルプランの作成を通して、これからの時代に生きる教員を育てる教員研修の在り方について研究を進めることとした。また、校内研究モデルプランを生かしたガイドブックを作成・配布・普及させることで、県内各学校での校内研究を充実させ、教師一人一人の授業改善へと繋げていきたいと考えた。

2 研究の目的

これからの時代に対応した教員研修の在り方について、校内研修の中核である校内研究に焦点をあて、校内研究モデルプランの作成を通して明らかにする。

3 研究計画

研究年度1年目（令和元年度）	研究年度2年目（令和2年度）
○実態把握 ○先進校への視察、文献調査 ○校内研究モデルプラン（暫定版）の作成	○協力校の授業研究会の参観及び取材 ○校内研究モデルプランの改善 ○ガイドブックの作成・発行

4 研究の概要

校内研究の充実を図るため、「限られた時間で効果的・効率的に」「参加・体験型へ」をキーワードに、1年間の校内研究の進め方をPDCAサイクルに沿ってまとめた校内研究モデルプランを作成した。また、校内研究に積極的に取り組んでいる学校の実践を調査研究し、モデルプランとともにそれをまとめ「校内研究ガイドブック」を作成した。この冊子は、URLやQRコードを掲載することで、協力校の実践例の視聴や参考文献の確認ができるような構成でまとめた。

5 研究の内容

(1) 校内研究に関する実態の把握と分析

千葉県総合教育センターで実施された「新任研究主任研修」（令和元年6月7日）の受講生 110 名（小学校籍 74 名、中学校籍 36 名）にアンケートを実施した。

【アンケート結果の主な項目】

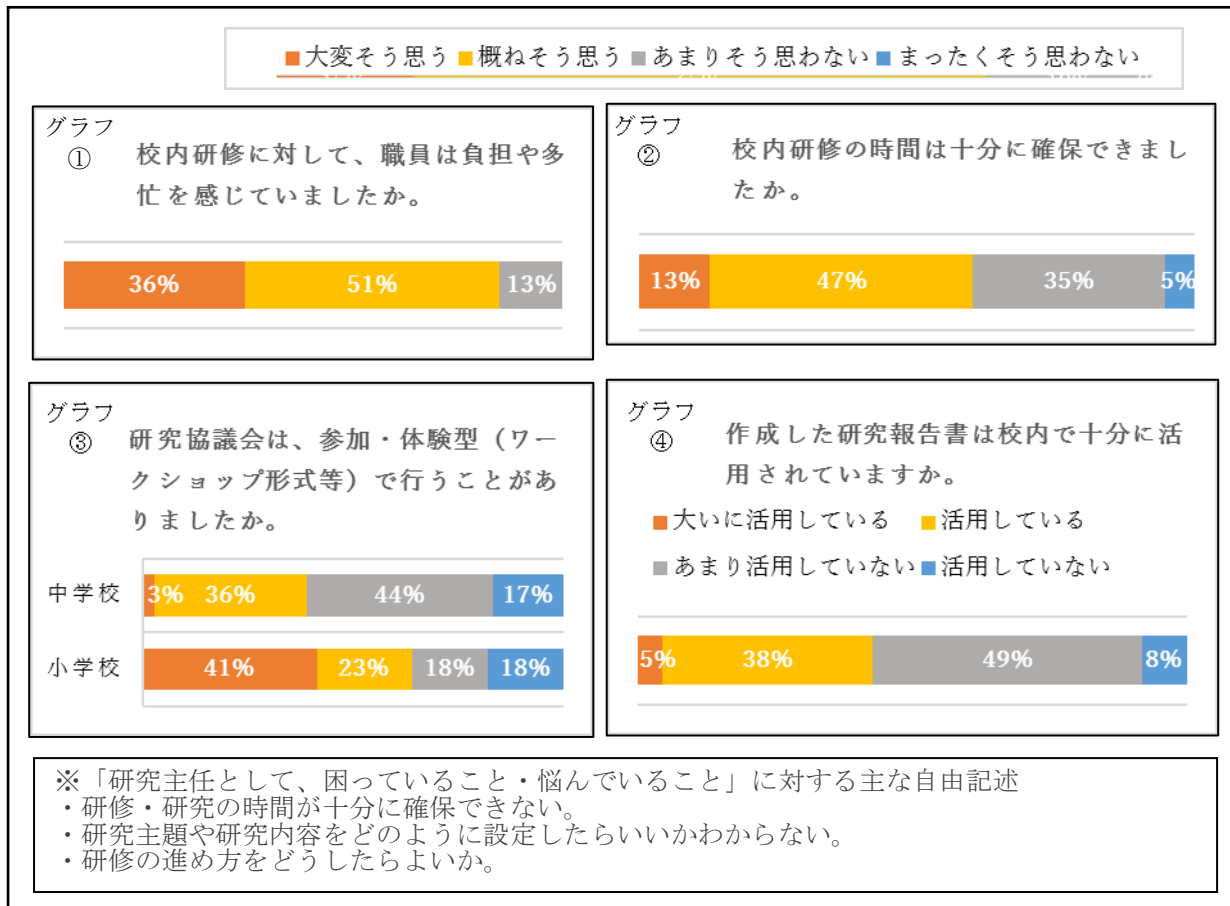


図1 校内研究に関するアンケートの結果

【考察】

グラフ①から職員の 87%が校内研修に対して、負担や多忙を感じている。グラフ②から研究主任の 40%が校内研修の時間が十分に確保できていないと答えている。自由記述欄の回答にも、「研修・研究の時間が十分に確保できない。」と答える研究主任が多い。校内研究を限られた時間の中で効率的・効果的にすすめていくことが重要になっている。

グラフ③から研究協議会の持ち方については、参加・体験型（ワークショップ形式等）の研究協議会を実施していない学校の割合も多く、特に中学校での導入は 40%以下である。参加・体験型で研究協議を行うことにより、全教職員が意見を出し合い、話し合いが充実することで参加者の研修意欲の高まりが期待できる。参加・体験型の研究協議を多くの学校に広めていく必要がある。

また、グラフ④から、年度末に研究報告書が作成されているが、次年度に十分活用されていない実態が明らかになった。研究の成果が次年度以降の授業改善に反映されなければ、研究を行う意義も感じられずに負担感が増してくるのではないかと危惧される。各学校で行われる実践が、次年度に成果として実感できる研究にしていかなければならない。学びの成果が実感できるような研究の進め方について検討していく必要がある。

また、自由記述から、研究主任が研究主題の設定の仕方や研究の進め方で悩んでいる姿もわかってきた。世代交代が進み、経験の浅い研究主任が増えてきている中で、具体的な実践例を集めて普及させることを通して、研究主任を支援していく必要がある。

(2) 校内研究モデルプランの作成について

ア 校内研究のモデルプラン作成の重点

実態調査の結果から、次の三点を重点とした。

- (ア)限られた時間の中での効果的・効率的な校内研究の在り方を示すこと
- (イ)教職員の意欲向上や話合いの充実のために、参加・体験型の研究協議を取り入れること
- (ウ)校内研究モデルプランを活用しながら学びの成果を実感できるようにすること

イ 校内研究モデルプラン

校内研究は、全教職員で計画的に取り組んでいくことが重要である。「研究の計画・共通理解」→「研究の実践」→「研究のまとめ」→「次年度に向けて」というPDCAサイクルの形態を取り入れることによって、研究を継続的に行うことができ、研究主題・研究実践等をより深く追究していくことができる。



図2 校内研究の年間サイクル

校内研究の年間サイクルに沿って、校内研究モデルプランを次のようにまとめた。

プロセス1 研究の計画・共通理解

1 実態把握をしよう

研究主題を設定するために、実態把握を行う。客観的データ（全国学力・学習状況調査等）に基づいて具体的に分析することや、日頃の授業や児童生徒の様子から実態をつかむことが大切である。

2 研究主題を設定しよう

研究主題は、全教職員の共通理解と納得に基づいて決定していく。研究主題は、研究の内容を端的に表現することが大切である。

3 研究の方向性を決めよう

研究における手立てや児童生徒の目指す姿、身に付けさせたい資質・能力を具体的に決定し、研究の見通し（研究目標）をもつ。それらについて、共通理解を図るために、具体的な研究仮説を決定する。

4 研究組織を決定しよう

校内研究を円滑に推進するためには、研究組織が必要である。研究主任が中心となり、研究推進委員会と連携・協力しながら運営していく。

5 年間研究計画を作成しよう

校内研究を組織的・計画的に運営していくためには、1年間の見通しをもち、実効的な年間研究計画をつくることが大切である。

プロセス2 研究の実践

1 校内授業研究の推進を図ろう

(1)役割分担

研究主任が中心となり各部会や学年等に役割を分担し、組織の機能を十分に生かしながら計画に沿って校内授業研究の準備と当日の運営を進めていく。

(2)授業参観の視点の共有

授業研究会の日程が決定したら、研究推進委員会等の組織を活用し、授業研究会での参観の視点を事前に決めておく必要がある。参観の視点を共有し、参加・体験型の研究協議会を行い、話し合いを深めていく。

(3)指導案の検討

授業者は、児童生徒の実態を把握し、指導案を作成する。指導案検討は、限られた時間の中で効果的に行うとともに、達成手段や手立ての検証となる授業展開であるかを十分に協議していく。

(4)授業研究会の実施（授業展開・協議会）

参加・体験型の研究協議会を企画・運営し、参加者全員が意見を出し合うことができ、授業者も参観者も共に学べるようにしていく。

(5)授業研究会のまとめ

研究協議会を通して確認された成果や課題は、今後の指導改善の手がかりになるので、全教職員で共有する場を設定していく。

2 日常の授業実践に生かそう

授業研究会で学んだことと自己の課題を踏まえ、日常の授業実践に生かしていく。また、相互授業参観等を実施する際は、教職員の負担感を減らせるように、開催時間や方法・内容を精選して取り組むことが大切である。研究組織を生かしながら、個人やグループ単位など学校の実態に応じて授業実践に取り組んでいく。

プロセス3 研究のまとめ

1 児童生徒の変容を把握しよう

研究の実践の積み重ねや児童生徒へのアンケート、学校評価等を基に、児童生徒の変容を把握する。

2 成果と課題の明確化を図ろう

成果と課題をまとめるときは、児童生徒の変容を根拠にして、達成手段や手立ての有効性を振り返る。多くの教職員の意見を反映することが大切である。

3 研究報告書（研究紀要）の作成をしよう

校内での実践を記録に残し、次年度以降に活用するために研究報告書を作成する。学校のWebサイトへの掲載や外部への配布等により、研究を広めたり、意見をもらったりすることができる。

プロセス4 次年度に向けて

1 次年度の研究の方向性を明確にしよう

研究の成果と課題や学校の実態等に基づいて、次年度の研究の方向性を決める。日常の授業実践で活用していくことと、次年度の研究を通して追究していくことを整理する。また、校内研究の進め方についても評価を行い、次年度に生かしていく。

2 研究全体会を開催しよう

研究推進委員会で協議したことを基に、研究全体会を開催する。1年間の研究の成果と課題を確認したり、次年度の研究の方向性について検討したりして、全教職員で共通理解を図る。

(3) 校内研究ガイドブックの作成

校内研究モデルプランを基に、校内研究ガイドブックを作成した。

ア 協力校の実践調査

調査期間中の2年間で、協力校延べ17校25回にわたり授業参観や取材をした。令和元年度は、「ちばっ子の学びの変革」の研究指定校を中心に授業参観をした。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため多くの公開授業研究会が中止になる中、校内授業研究会を行っている学校を教育事務所の指導主事等から推薦していただいた。

協力していただいた学校は、次の通りである。

【令和元年度】

- ・長生村立高根小学校
- ・栄町立竜角寺台小学校
- ・板橋区立上板橋第三小学校
- ・千葉県立船橋東高等学校
- ・成田市立向台小学校
- ・松戸市立小金中学校
- ・館山市立館山小学校
- ・千葉県立夷隅特別支援学校
- ・習志野市立藤崎小学校
- ・白井市立白井第二小学校

【令和2年度】

- ・流山市立流山北小学校
- ・成田市立本城小学校
- ・酒々井町立酒々井小学校
- ・四街道市立中央小学校
- ・市川市立新井小学校
- ・一宮町立一宮小学校
- ・白井市立白井第二小学校

イ 校内研究ガイドブックの特徴

(ア) 構成の工夫

研究のプロセスごとに具体的実践例を多く示し、学校現場でガイドブックを活用しながら、校内研究を進めていけるように構成した。また、読みやすくなるように二人のキャラクター（「サポ先生」と「わかばさん」）を使用した。「サポ先生」は校内研究を進めるポイント、「わかばさん」は効果的・効率的に校内研究を進めるための手立てを、吹き出しを使い会話文で示した。

(イ)限られた時間で効果的・効率的な研究へ

校内研究への教職員の負担や多忙を解消するために、限られた時間で効果的・効率的に校内研究を進められるようなモデルプランとした。そのために、取組例の中に、どのくらいの時間で取り組むことができるか提示した。(※1)また、参考となる資料がすぐに探せるようにURLやQRコード、巻末資料をつけた。

(※2)さらに、効果的・効率的に進めるためのポイントを示した。(※3)

(図3)

(3) 指導案の検討

授業者は、児童生徒の実態を把握し、指導案を作成していきます。指導案検討は、限られた時間の中で効果的に行うとともに、達成手段や手立ての検証となる授業展開であるかを十分に協議していきましょう。

※2

指導案作成については、巻末資料「指導案参考例(道徳)」(P34、35)や「小学校教育課程の展開」(千葉県教育委員会)を参考にするのもいいですね。

取組例 指導案検討を1時間程度で行うプログラム

指導案検討では、協議の視点を明確にし、1時間程度で行えるプログラムを作成するとよい。

※1

○単元のねらいと教材観について説明と質疑応答(15分)

○単元計画の説明と質疑応答(15分)

○本時の学習指導過程の説明と質疑応答(20分)

○本時のポイント場面と授業参観の視点の確認(10分)

付箋を使った「拡大指導案」等の思考ツールを活用し、検討する方法もあります。

【指導案検討の視点の例】

○児童生徒に身につけたい力は明確になっているか。

○目標を達成するための単元構成や指導内容になっているか。

(児童生徒の実態を踏まえて)

○授業研究や日常の授業実践の中での成果や課題を生かしているか。

☆その他、授業者が検討してもらいたい点について話し合う。

※2

過去の指導案等を基に指導観や児童生徒の実態を加味し、作成していくことも有効です。千葉県総合教育センターWebサイトの「Wakaba(学習指導案等検索)」も参考にしつね!

Wakaba 学習指導案等検索

サボ先生

わかばさん

指導案作成者は、1週間前には検討会参加者に指導案を渡しおきましょう。

参加者は事前に目を通し、誤字脱字を含め、気が付いたことを指導案に書き込んでおき、検討会へ参加しましょう。

※3

参加者に指導案検討の流れと時間配分を知らせておくことで、時間を意識して話し合いを進めることができます!

図3 校内研究ガイドブック(一部抜粋)

(ロ)参加・体験型での協議を取り入れた研究へ

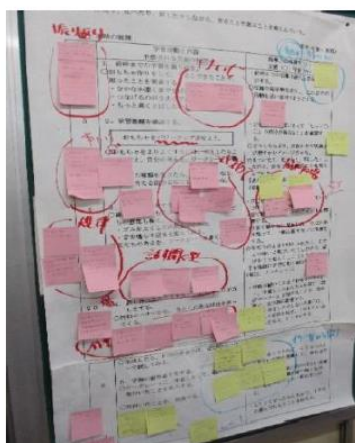
思考ツールを使った参加・体験型の研究協議会等の取組例(図4等)を、研究の場面ごとに示した。また、協議の様子がよくわかるように先進校の取組を映像でまとめ、視聴できるようにした。映像には、協議会の進め方や実施のポイント等をテロップで解説を加えた。映像は、次の7本を作成した。

○作成した研究協議会等の映像

- ・研究主題設定に向けての協議～カリキュラム・マネジメントの実践～
- ・指導案の検討
- ・研究協議会～拡大指導案を活用して～（図5）
- ・公開研究協議会～拡大指導案（ICT）を活用して～
- ・研究協議会～Yチャートを活用して～
- ・研究協議会～マトリックスを活用して～
- ・研究推進委員会～成果と課題の明確化～

○参加・体験型での研究協議の実践例

【拡大指導案を活用して】



- 指導案に沿って話し合いができるので、意見をまとめやすい。
- 本時の授業を指導者の意図を踏まえて検討できる。
- ▲本時中心の協議には向いているが、単元全体の協議には不向きである。



図5に示したような映像を視聴することができます。

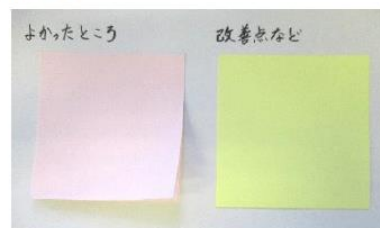
研究協議会
～拡大指導案を活用して～

<事前準備>

- ①研究だより等で研究協議会の流れや、付箋を使ったグループ協議について参加者に周知する。
- ②拡大した指導案（模造紙程度の大きさ）や付箋を用意する。

<当日>

- ①授業を参観しながら、協議の視点に沿って付箋を記入する。
- ②ファシリテーターの進行により、指導案に沿って導入から協議を行う。参加者は意見を言いながら付箋を貼っていく。同じ意見の場合は、順番を待つことなく、近くに付箋を貼って発言していく。
- ③ファシリテーターは、出された意見を比較しまとめたり、図で関連性を表したりしながら話し合いを進めていく。
- ④最後に、その他気づいた点等を発言していく。



用意された付箋



グループでの協議



拡大指導案を使っでの協議

図4 校内研究ガイドブック（一部抜粋）

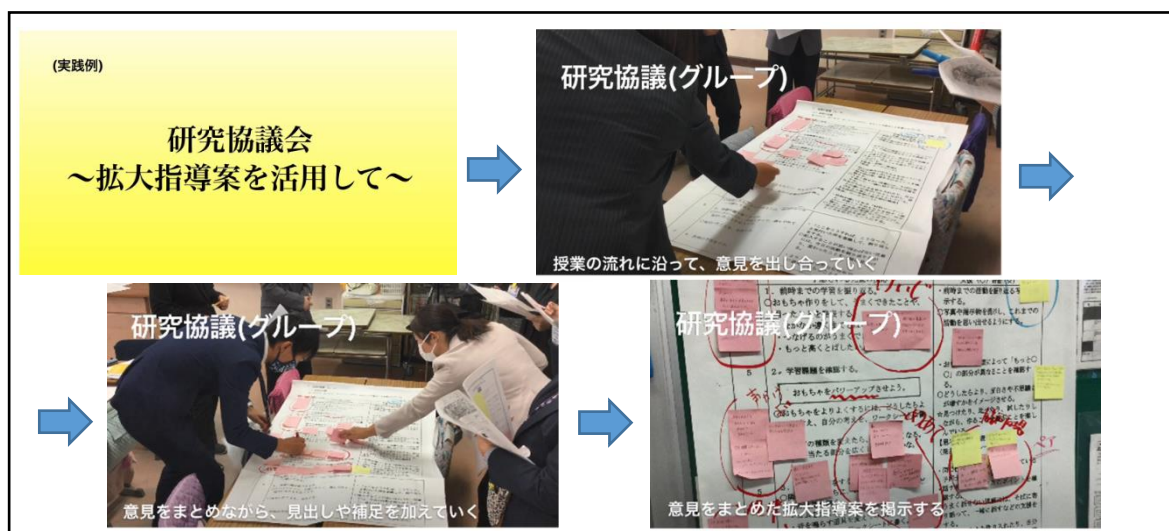


図5 拡大指導案を活用した研究協議会の映像（一部抜粋）

(エ) 学びの成果を実感できる研究へ

研究協議会を通して確認された成果や課題を今後の指導改善の手がかりにするために、全教職員で共通理解できるような授業研究会のまとめ方の取組例を示した。(図6)

また、授業研究会で学んだことと自己の課題を踏まえ、日常の授業実践に生かしていくことが大切である。そこで、手軽に行える授業参観の取組例を示した。(図7)

取組例 授業研究会のまとめ方

○研究報告会を行う。

- ・研究協議会を分科会形式で行った場合は、全体会を設定したり、職員打合せや職員会議等の時間を活用したりして共有する。

○研究協議会でまとめたシート等をそのまま職員室等の掲示コーナー（研修コーナー）等に掲示して共有する。

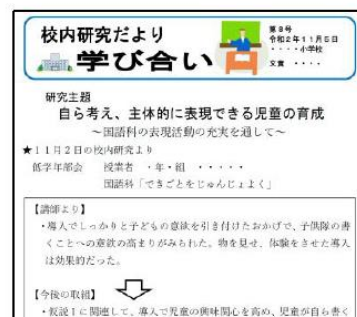


職員室等に掲示して共有

○「研究だより」を発行し、共通理解を図る。



研究協議会を分科会ごとに行った時などは、話し合われた内容や講師からの指導、今後どのように取り組んでいくのか等について、共通理解を図ることが大切です。



研究だよりの例

○研究協議会の話し合いを受け、指導案やワークシート等を修正し、次年度へ生かす。

修正した指導案やワークシートを使って、他の教員が、再度実践してみてもよいですね。



授業で使用した掲示物や提示資料等は、次年度も使えるように保存しておくこともおすすめです。

○授業研究会を通しての参加者の学びを共有する。

- ・参加者自身が授業研究会で学んだこと、取り組んでいきたいことなどを付箋等を書いて掲示し、全教職員で共通理解を図る。

○研究協議会など改まった場所だけでなく、普段の会話の中で授業改善が話題になるような雰囲気づくりを心がける。

図6 校内研究ガイドブック（一部抜粋）

（２）手軽に行える授業参観

取組例 授業の録画映像を活用

- ①授業者が自分で授業のすべて、または一部を録画する。
- ②授業展開後、グループで録画映像を視聴し、協議する。

録画した自分の授業を客観的に見ることも大切です。



取組例 ポイント授業参観

- ①授業者が簡単な授業展開案と授業改善の視点を記入したシートを参観者へ配付する。
- ②参観者は、10～15分程度の部分的な授業参観をし、気付いたことを付箋に書いて授業者に渡す。
- ③授業者は、集まった付箋を整理し、考察した内容をシートの考察欄に記入する。
- ④研究協議は、必要に応じて行う。



日常的にお互いの授業を参観できる雰囲気づくりをしていきましょう。
短い時間でも繰り返し取り組めるといいですね。

5年〇組 算数 指導者 〇〇〇〇

【単元名・本時の目標】

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【本時の展開】

【授業者考察】

1 見出す

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

2 調べる

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

3 深める

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

参観 8:50～9:05

改善の視点

・〇〇〇〇〇〇

・〇〇〇〇〇〇

4 まとめあげる

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇



ポイント授業参観用シート例

図7 校内研究ガイドブック（一部抜粋）

ウ 校内研究ガイドブックの概要版の作成

「校内研究ガイドブック」の概要版として、リーフレット（図8）を作成した。概要版は、研究のモデルプランを簡潔に示してあり、研究の進捗状況を、「□」にチェックしながら確認できるようにした。また、リーフレットに記載したQRコードからも、先進校の研究協議の様子を視聴したり、参考文献等を確認したりできるようにした。



図8 校内研究ガイドブック概要版（リーフレット）

6 今後に向けて

今年度3月に、県内の各学校及び関係教育機関等に校内研究ガイドブックを配布するとともに、千葉県総合教育センターのWebサイトからダウンロードできるようにする。

令和3年度以降は、各種研修会等でリーフレットを配布し、校内研究ガイドブックの普及を図る。また、千葉県総合教育センターで行う「新任研究主任研修会」「中堅教諭等資質向上研修Ⅰ」「出前あすなろ塾」等の研修事業では、校内研究ガイドブックを活用しての講話・演習を行い、校内研究ガイドブックの普及を図る。